

## 高度経済成長期以降の江東内部河川・運河の利用に関する研究

志村 秀明・川名 優孝・野知菜穂美

Study on Civic Use of Rivers and Canals in Koto Area since the High Economic Growth Period

Hideaki Shimura, Masataka Kawana and Naomi Nochi

平成 27 年 3 月

芝 浦 工 業 大 学

# 高度経済成長期以降の江東内部河川・運河の利用に関する研究

## Study on Civic Use of Rivers and Canals in Koto Area since the High Economic Growth Period

志村秀明\* 川名優孝\*\* 野知菜穂美\*\*\*

Hideaki Shimura, Masataka Kawana and Naomi Nochi

The purpose of this study is to clarify the civic use of rivers and canals in Koto area of Tokyo since the high economic growth period. This clarifies below things.

- 1) The people began to use the rivers and canals based on the maintenance of bridges, piers, watersides and esplanades.
- 2) The factors that the people began and used of rivers and canals are tradition of the history and the culture, and the correspondence to a flood.
- 3) The organization of the people using rivers and canals stimulates and exchanges information each other and cooperates.

Keywords : Rivers, Canals, Koto area in Tokyo, civic using, Water transportation, maintenance of waterside

### 1. はじめに

#### 1.1 研究の背景と目的

東京都といった大都市には、河川・運河が多く存在している。東京の河川・運河は、多様な役割・機能を持ち、産業や物流で人々の暮らしと密接に関わりを持っていた<sup>1)</sup>。しかし、高度経済成長期の都市の産業構造転換による近代的発展やそれに伴う水辺環境悪化により、市民との関係は希薄になってしまった<sup>2)</sup>。

それが近年、東京東部の江東内部河川や隅田川流域、臨海部では、親水空間整備や、規制緩和によって、水辺に賑わいを取り戻す市民活動やイベントが活発になっている。また東京スカイツリーの開業を機に、市民の水辺への関心は以前にも増して高まっている<sup>3)</sup>。

そこで本研究では、今後の市民・民間事業者の河川・運河の利用促進に寄与する知見を得ることを主眼として、高度経済成長期以降の江東内部河川・運河の利用の変遷と実態を明らかにすることを目的とする。

#### 1.2 研究の方法

研究対象地である江東内部河川地域を対象として、文献調査<sup>注1)</sup>によって、2章では公共事業による河川・運河整備の変遷を、3章では河川・運河利用の変遷を明らかにし、高度経済成長期以降の江東内部河川地域の河

川・運河の変遷を明らかにする。

更に、市民などの河川・運河利用が活発な地区を対象を絞りヒアリング調査(表1)を実施した。その上で4章5章6章では江東内部河川地域の住民・NPOなど・民間事業者<sup>注2)</sup>の河川・運河の利用の変遷と実態に関して、①親水空間整備②利用組織と利用状況③利用の展開から明らかにする。

#### 1.3 研究対象地の概要

研究対象地である江東内部河川地域を図1に示す。隅田川と荒川放水路に挟まれた江東三角地帯の江東区内が研究対象地である。研究対象地内の11本の河川を江東内部河川という<sup>4)</sup>。江東三角地帯は、大河川が集中して

表1 ヒアリング調査の概要

Table 1. List of interview research

団体名	主な活動	調査実施日	
住民	亀戸カヌー万歩俱樂部 田中川アジサイクラブ 大島カヌー散歩クラブ	カヌー活動など 河川敷の植栽管理 カヌー、河川敷の植栽管理	2013.07.20 2013.10.19 2013.11.03
NPOなど	和船友の会 江東区の水辺に親む会 江東区カヌー協会	和船の操船と乗船会、イベントへの参加 水辺に関する調査・企画運営緑化事業の調査 江東区のカヌー団体の統括	2013.09.04 2013.08.09 2013.11.03
民間事業者	日の丸自動車興業㈱ 日の丸サンス㈱ 東京都観光汽船㈱ ※ 東京都公園協会	水陸両用バス運行、観光バス事業 水影テラス営業、地方SA営業 隅田川の観光舟運 「東京水辺ライン」、公園管理	2013.09.11 2013.10.15 2013.11.12 2013.12.06
自治体	江東区水辺とみどりの課	公共事業など	2013.03.28
質問内容	・団体概要(設立日、人数、沿革)、設立経緯 ・活動または事業の概要 ・他団体との連携、関わりについて ・団体として、東京の河川・運河の利用に果たす役割 など		

※電子メールでの調査

\* 工学部建築学科 Department of Architecture, College of Engineering

\*\* 東京海洋大学 産学・地域連携推進機構

\*\*\* 大学院理工学研究科建設工学専攻修士課程修了 Completed Graduate School of Engineering and Science, Architecture and Civic Engineering







### 3.1 観光舟運

東京都観光汽船株式会社の「隅田川の上水バス事業」は、1885年の隅田川の大洪水の臨時渡船<sup>注9)</sup>を前身とし、戦時中1944年の休止を経て、名称を「水上バス」と改め1950年に再開した<sup>7)</sup>。その後1970年前後に、隅田川の水質汚濁や悪臭により利用者が減少して事業を縮小したが、再び事業拡大をしつつ現在まで継続している。

水質改善にともない水上バス利用者は増えていった。公営の江東区水上バスが1985年に、水辺公社（現：東京都公園協会）の「東京水辺ライン」が1990年に就航した。しかし、江東区水上バスは、扇橋開門が日曜日に通過できないなど、自治体間連携が上手く行かなかったことなどにより事業採算が合わなかったため、1998年に民営化し、その後2002年に廃止された。

また、小規模事業者などが小型船や屋形船を運航して、2011年から防災船着場を使用して不定期航路で観光舟運を開始している。

更に、東京スカイツリーが2012年に開業したのにもともない、扇橋開門と荒川ロックゲートの利用日が拡大した。それを機に、水陸両用バス「スカイダック」（以下：スカイダック）が2013年から運行している。

### 3.2 隅田川の再生

隅田川では、水質悪化によって「早慶レガッタ」と「両国川開大花火（隅田川花火大会）」が1962年に、「隅田川灯ろう流し」が1965年に休止となり、隅田川の屋形船も姿を消した。その後、柳橋の料亭<sup>注10)</sup>女将たちが1970年代に水質改善を自治体や地域に粘り強く働きかけたことなどにより、隅田川の水質は改善していった。そして「早慶レガッタ」と「隅田川花火大会（両国川開大花火）」が1978年に復活した。

### 3.3 市民の利用

江東区白河小学校の子ども会が、隅田川に鮭を呼び戻そうとする「隅田川鮭の会」<sup>注11)</sup>を1985年に結成した。その後この会の活動は、江東区の小中学校を巻き込んで2013年には第29回目の活動を開催した。

旧中川流域のふれあい橋付近では、「旧中川灯籠流し」が1999年に始まった。また、水位が一定という特性から、江戸川区のボートイベントや手漕船活動が2003年頃から始まり、江東区民のカヌー活動が2011年に始まった。2013年には、旧中川亀戸地区の住民が「旧中川アジサイクラブ」を結成し、河川緑地のアジサイを育成する活動と、アジサイにちなんだイベントを開催している。

### 3.4 イベント・社会実験

「水彩フェスティバル」が小名木川のクローバー橋周辺で2000年から、江戸川区の「ボートフェスティバル」が旧中川で2004年から、「お江戸深川さくらまつり」が大横川の石島橋と黒船橋船着場で2005年から始まっている。

隅田川では、「両国納涼水辺まつり」が両国船着場で2008年から、「リバーオータムフェア」が明石町船着場で2008年から、「船カフェ社会実験（以下：船カフェ）」<sup>注12)</sup>が豊洲地区運河ルネサンス協議会により豊洲運河船着場で2011年から、「こどもカヌー大会」と「リバーフェスタ江東」が旧中川の川の駅で2012年から、「旧中川アジサイ祭り」が2013年から開催されている。船カフェは、新たな船着場利用とその仕組みを示し、「旧中川アジサイ祭り」では、豊洲運河の船カフェを参考にして「旧中川船カフェ」を実施している。

以上のように、江東内部河川と運河での新たな市民利用が、2000年以降に活発に行われるようになってきている。

また、江東区と墨田区で管理する船着場を用いた社会実験が2009年から実施された。更に、船着場の安全性と利便性、観光利用の検証と民間事業者による舟運事業を実現するために、「江東区・墨田区の観光連携に資する船着場活用の社会実験」が2010年から実施された。

### 3.5 小結

本章では、河川・運河の利用について以下のことを明らかにした。

- ・1985年から1998年に江東区が公営の水上バスを運航させていたが、自治体間連携が上手くいかなかったことなどにより採算が取れず、民間移行した後に、2002年に廃止された。
- ・2011年以降、小規模事業者が防災船着場の利用を始めた。
- ・扇橋開門と荒川ロックゲートの利用日の拡大や東京スカイツリー開業やスカイダック運行開始など、観光舟運の機運が高まっている。
- ・江東内部河川地域の東部では、内水位が一定であることを生かして、市民による水面利用が行われている。
- ・2000年以降、江東内部河川地域では新たなイベントが活発に開催されている。
- ・川の駅では、住民・NPO・企業が協働した河川・運河の利用が始まり、今後の発展が期待されている。

以上の分析結果を踏まえた、江東区の河川・運河利用の状況を図4に示す。

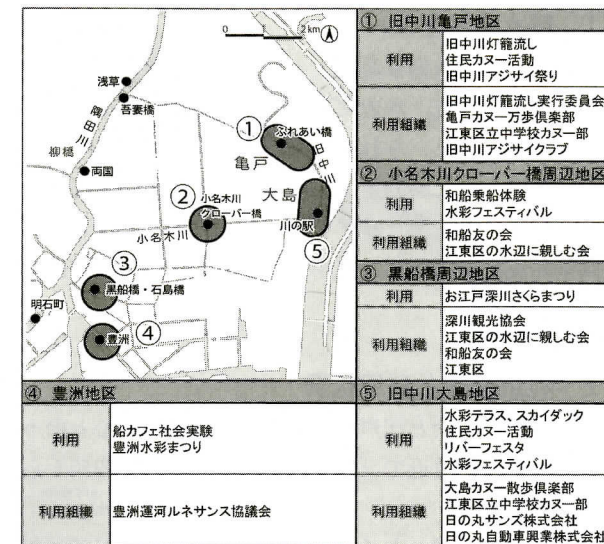


図4 江東区内部河川地域の河川・運河利用地区  
Fig. 4. Zone of civic use of rivers and canals in Koto area

江東内部河川地域には、河川・運河の利用が多い拠点的地区が5つあり、そのうち市民利用がある地区が、「小名木川クローバー橋周辺地区」「旧中川亀戸地区」「旧中川大島地区」「豊洲地区」の4つである。恒常的な利用組織が複数ある地区は、小名木川クローバー橋周辺地区、旧中川亀戸地区、旧中川大島地区の3つであり、次章からこれら3地区について詳細に調査・分析する。

## 4. 小名木川クローバー橋周辺地区での河川利用

本章では、小名木川クローバー橋（以下：クローバー橋）周辺地区の河川利用について、公共事業による親水空間整備、利用組織と利用状況、利用の展開に着目して明らかにする。クローバー橋周辺地区での河川利用変遷を図5に示す。

### 4.1 親水空間整備

横十間川親水公園が1984年に、暗渠化ではなく親水公園化し、淡水池やボート場や水上アスレチックを含めて整備された。小名木川沿いの河川並木と乗船場が1985年に整備された。クローバー橋が1995年に架橋され、横十間川の遊歩道が2004年に、小名木川の遊歩道が2011年から整備され始めている。

### 4.2 利用組織と利用状況

公営の江東区水上バスが1985年から運航していた。江東区水上バスは1998年の民営化を経て、2002年に廃止さ

れたために、江東区水上バスが使用していた乗船場は使用されなくなった。

一方で「筏レース」が1995年頃から始まり、乗船場を使用していたが、1998年に休止した。代わりに、「NPO法人江東区の水辺に親しむ会」（以下：水辺の会）が、筏レースを引き継いで、「水彩フェスティバル」を2000年から開催している。

「和船友の会」は、1995年に行われた「木造和船造船技術保存事業」による和船漕ぎ試乗会の参加者が発起人となり設立された。イベントなどで和船体験試乗会を実施していたが、1997年からは横十間川親水公園内の水面を使用して、無料乗船体験会を毎週開催している。また、和船友の会は、第1回から水彩フェスティバルに参加している。

### 4.3 利用の展開

江東区水上バスが廃止されてからも、整備された乗船場を使用して、市民・NPOが河川利用を継続している。また、親水公園に整備された水面を使用して、和船友の会が活動しており、2000年から他のNPO（水辺の会）と連携してイベント（水彩フェスティバル）を開催している。水彩フェスティバルを開催しているNPO（水辺の会）は、2005年から黒船橋地区の「お江戸深川さくらまつり」<sup>注13)</sup>の開催を支援し、更に2013年には旧中川大島地区の川の駅での活動を始めている。

### 4.4 小結

本章では、クローバー橋周辺地区での河川利用について以下のことを明らかにした。

- ・江東区水上バスの廃止により、使用されなくなった乗船場を市民・NPOが使用できる機会が生じた。そして、乗船場を利用する活動として、また地域振興を目的として、水彩フェスティバルが開催されるようになった。
- ・和船友の会が、整備された横十間川親水公園を利用することで、1997年から恒常的な乗船体験会という活動へと繋がった。
- ・クローバー橋周辺地区では、NPO（水辺の会）や和船友の会などが連携しつつ、河川・運河を利用している。連携は、水彩フェスティバルで形成された。
- ・市民・NPO間の連携は、他地区でのイベント「お江戸深川さくらまつり」の支援に繋がっている。また水彩フェスティバルは、2013年からは旧中川大島地区の川の駅と連携して、開催されている。



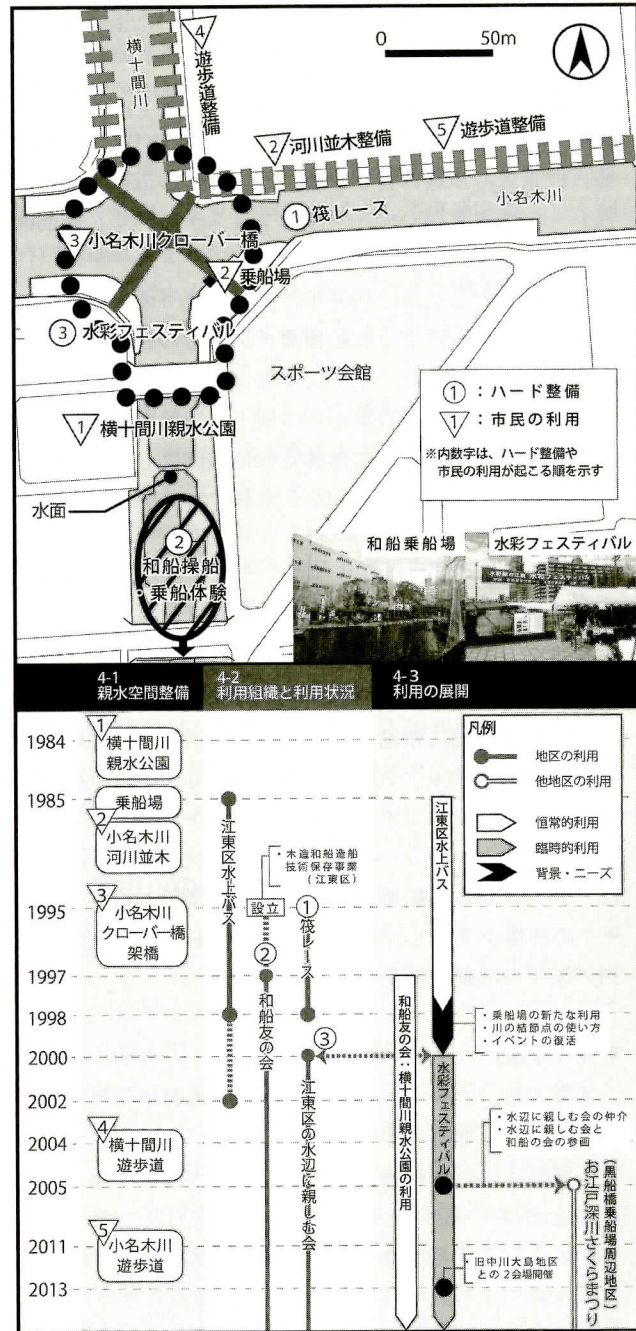


図5 小名木川クローバー橋周辺地区での河川利用  
Fig. 5. Civic use of rivers in zone of Onagigawa clover bridge

### 5. 旧中川亀戸地区での河川利用

本章では、旧中川亀戸地区での河川利用について、公共事業による親水空間整備、利用組織と利用状況、利用の展開に着目して明らかにする。旧中川亀戸地区での河川・運河の利用変遷を図6に示す。

#### 5.1 親水空間整備

江東内部河川整備事業によって、旧中川では1971年から2011年にかけて、水辺に近づく河川敷の緑地・親水空間が整備された。ふれあい橋が亀戸9丁目にあった企業の協力のもとに1995年に架橋された。もみじ大橋下艇庫が2004年に、荒川ロックゲートが2005年に、亀戸中央公園乗船場が2010年に、亀小橋下艇庫が2011年に整備された。

#### 5.2 利用組織と利用状況

亀戸9丁目町会と江戸川区平井東自治会が中心となって、ふれあい橋付近で「旧中川灯籠流し」が1999年から開催されている。

江戸川区側でポートイベントや手漕船の活動が2003年から始まった。江戸川区側でのポートイベントや手漕船の活動は、荒川ロックゲートの完成によって活発になっていった。

江東区では、「亀戸カヌー万歩倶楽部」が2011年に設立し、住民のカヌー活動が始まった。亀戸カヌー万歩倶楽部は、平常時はカヌーを楽しむことに加え、防災時のカヌー利用訓練を目的にしている。亀戸地区が2013年に景観重点地区<sup>注14)</sup>に指定されたことを契機として、亀戸9丁目の住民が「旧中川アジサイクラブ」を設立し、旧中川の河川敷を活用して、アジサイの植え付け・管理やイベント「旧中川アジサイ祭り」を開催している。

#### 5.3 利用の展開

旧中川亀戸地区では、ふれあい橋の架橋を機に、江東区亀戸9丁目町会と江戸川区平井東自治会の交流が始まった。そして両区の町会・自治会によって地域の歴史を伝承しようとする「旧中川灯籠流し」が始まった。これにより、住民は旧中川に親しむようになっていった。

その後、江戸川区側でポートイベントや手漕船活動が始まったこと、江東区立中学校カヌー部が設立されたことに刺激されて、亀戸地区の住民は亀戸カヌー万歩倶楽部を設立して、旧中川をカヌーで利用するようになった。それとともに、江東区によって橋下の艇庫が整備された。亀戸カヌー万歩倶楽部は、江東区カヌー協会と協力し、2012年に水防訓練を実施した。また、豊洲地区運河ルネサンスの「船カフェ」を参考に、2013年の「旧中川アジサイ祭り」にて亀戸中央公園乗船場を使用して「旧中川船カフェ」を実施するなど、他地区との連携が始まっている。

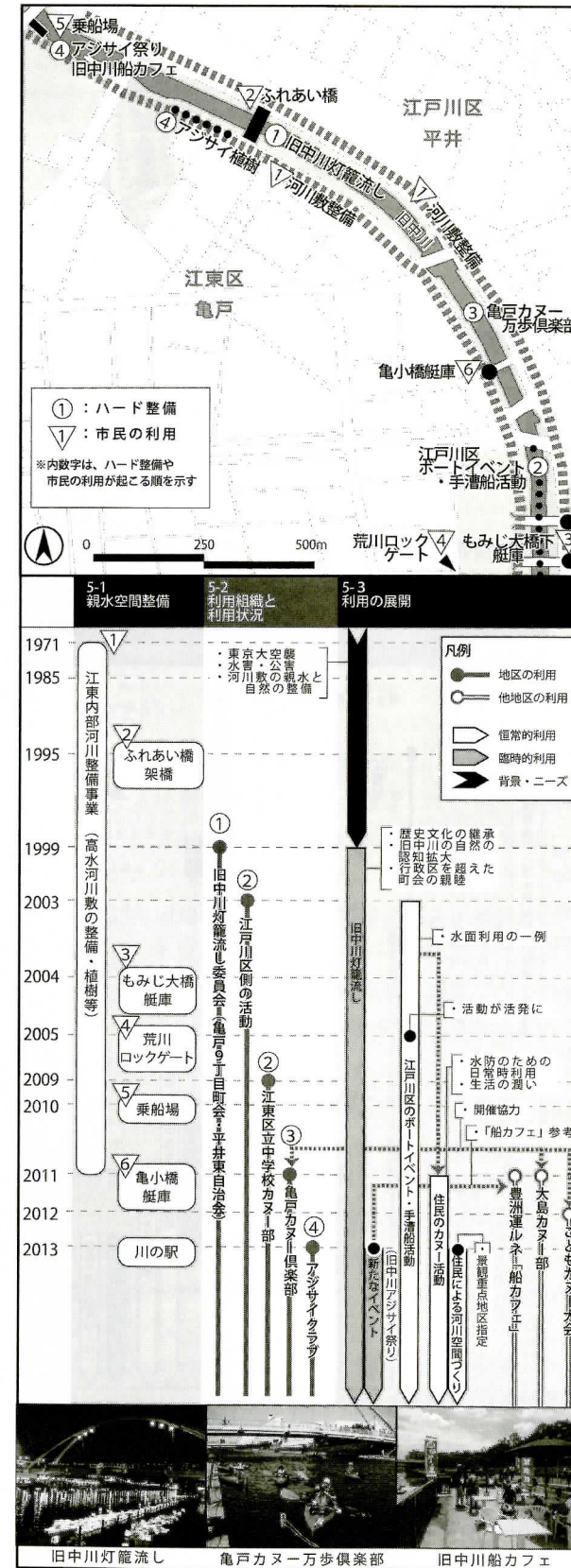


図6 旧中川亀戸地区での河川利用  
Fig. 6. Civic use of rivers in zone of Kyunakagawa Kameido

#### 5.4 小結

本章では、旧中川亀戸地区での河川利用について以下のことを明らかにした。

- ・旧中川亀戸地区では、ふれあい橋の架橋を契機に「旧中川灯籠流し」が開催されるようになり、住民は旧中川に親しむようになっていき、また河川・運河の利用が始まっていった。
- ・江戸川区側で始まったポートイベントや手漕船の活動は、2005年の荒川ロックゲート完成により、活発になっていった。
- ・江戸川区側のポートイベントや手漕船活動と江東区立中学校カヌー部設立に刺激されて、亀戸の住民はカヌークラブを設立した。それとともに亀小橋下艇庫が2011年に整備されて、住民のカヌー活動が始まった。
- ・亀戸地区が、2013年に景観重点地区に指定されたことが契機となり、河川敷の魅力づくりとしてアジサイの植樹・管理を行う住民団体が設立された。
- ・2013年に開催された「旧中川アジサイ祭り」では、豊洲地区の「船カフェ」を参考にして、「旧中川船カフェ」が開催された。
- ・旧中川亀戸地区では、住民を中心として、地域の歴史の伝承と、レジャーとスポーツを兼ねた災害時対応訓練、新たな魅力づくりという視点で河川・運河の利用が展開している。

### 6. 旧中川大島地区での河川利用

本章では、旧中川大島地区での河川利用について、公共事業による親水空間整備、利用組織と利用状況、利用の展開に着目して明らかにする。旧中川大島地区での河川・運河の利用変遷を図7に示す。

#### 6.1 親水空間整備

番所橋乗船場が1985年に整備された。中川船番所資料館が2003年に開館した。もみじ大橋下艇庫が2004年に、荒川ロックゲートが2005年に、江東内部河川整備事業が2011年に完了し河川敷の緑地・親水空間整備がされ、また、中川大橋下艇庫が2011年に整備された。かつて中川船番所があったということで、江東区によって川の駅が2013年に整備され、水陸両用バスが入水する多目的スロープと手漕船着場も整備された。

#### 6.2 利用組織と利用状況

江戸川区側で2003年から始まったポートイベントや手漕船の活動は、2005年に荒川ロックゲートが完成したこ



とで船の航行の自由度が増したため、活発になっていった。それに刺激されて、江東区立中学校カヌー部<sup>注15)</sup>の活動が2009年から始まった。

番所橋乗船場は、江東区水上バスが廃止されてからほとんど使用されていなかったが、「江東区・墨田区の観光連携に資する船着場活用の社会実験」によって2011年から小規模船舶事業者が使用するようになった。

亀戸カヌー万歩倶楽部を設立した亀戸地区住民と連絡を取り合い、大島地区の住民による「大島カヌー散歩倶楽部」が2011年に設立した。大島カヌー散歩倶楽部は、発災時のカヌー利用訓練を目的としてカヌー活動を行う他、河川敷の植栽管理を2013年から行っている。川の駅が2013年に整備され、スカイダックと水彩テラスの営業が始まっている。

### 6.3 利用の展開

江東区立中学校カヌー部が2009年に設立し、その活動拠点を区立大島中学校に置いた。それにより、江東区の住民はカヌーへの関心を高めた。江東区立中学校カヌー部と江戸川区の手漕船活動は、旧中川大島地区にあるもみじ大橋下艇庫を使用していたので、それに旧中川大島地区の住民は刺激を受け、2011年からカヌー活動を始めている。

川の駅が2013年に整備され、2013年の水彩フェスティバルでは、クローバー橋周辺地区に加えて、川の駅も会場となった。

大島カヌー散歩倶楽部は、水彩テラスを運営する「日の丸サンズ(株)」の協力を得て、2012年から河川敷へのナノハナなどの草花の播種といった魅力づくりを始めた。スカイダックを運行する日の丸自動車興業(株)は、2013年から水彩フェスティバルを支援している。

以上のように、住民の活動に加えて、住民とNPO、民間事業者が連携してのイベントの開催、また住民と民間企業との連携へと展開している。

### 6.4 小結

本章では、旧中川大島地区の河川利用について以下のことを明らかにした。

・江戸川区側で2003年から始まったボートイベントや手漕船の活動は、2005年に荒川ロックゲートが完成したことで船の航行の自由度が増したため、活発になっていった。それに刺激されて、江東区立中学校カヌー部<sup>注13)</sup>の活動が2009年から始まった。更にそれらに刺激されて、大島カヌー散歩倶楽部が設立され、住民はカヌー活動を

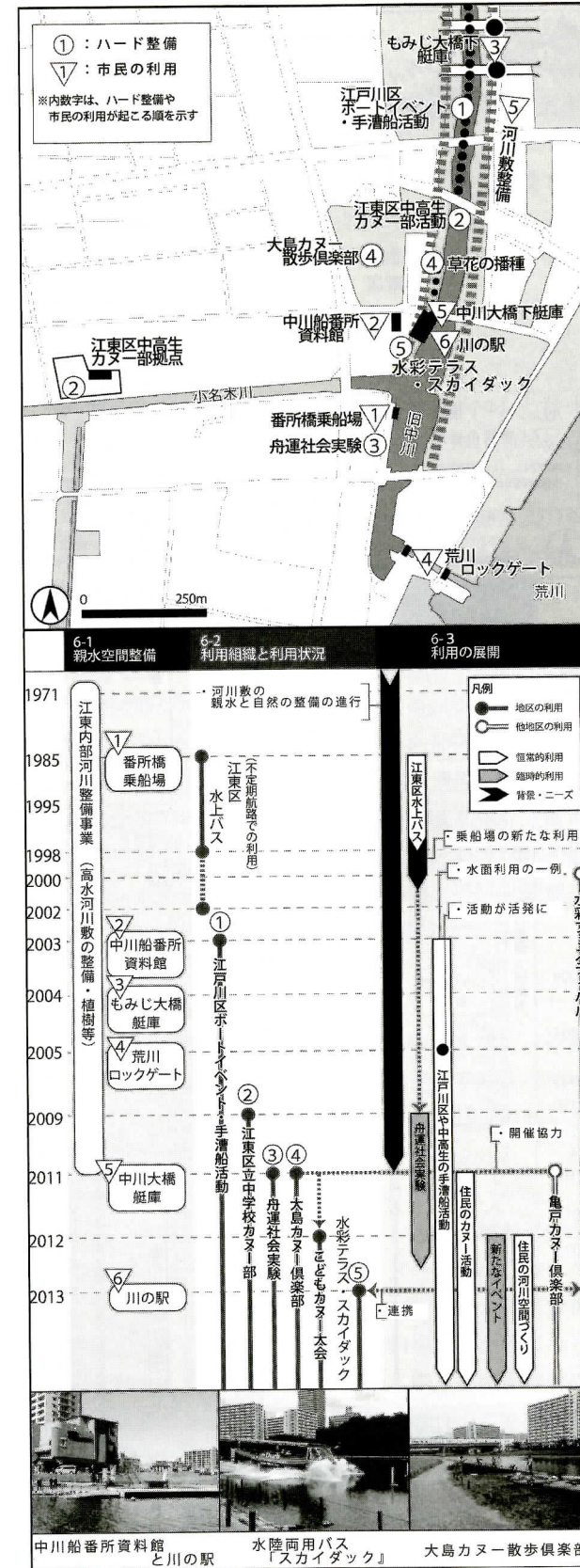


図7 旧中川大島地区での河川利用

Fig. 7. Civic use of rivers in zone of Kyunakagawa Ojima

開始した。

・2003年に小名木川の舟運の歴史を伝える、中川船番所資料館が開館した。やはりかつて中川船番所があったということで、江東区によって川の駅が2013年に整備され、水陸両用バスが入水する多目的スロープと手漕船船着場も整備された。

・番所橋乗船場は、江東区水上バスが廃止されてからほとんど使用されていなかったが、「江東区・墨田区の観光連携に資する船着場活用の社会実験」が2011年から始まり、小規模船舶事業者によって再び使用されるようになった。

・水彩フェスティバルでは、クローバー橋周辺地区に加えて、川の駅も会場となり、2つの地区で連携してイベントが行われている。

・住民の活動に加えて、住民とNPO、民間事業者が連携してのイベントの開催、また住民と民間企業との連携へと展開している。

### 7. まとめ

本研究では、市民・民間事業者の河川・運河の利用促進に寄与する知見を得ることを主眼として、高度経済成長期以降の江東内部河川・運河の利用の変遷と実態について、以下のことを明らかにした。

①江東内部河川地域では、治水整備が1970年代半ばにほぼ完了し、水質改善の試みは2000年頃までにほぼ完了し、親水空間の整備は1975年頃から継続して行われている。また河川・運河利用の規制緩和の取り組みが1990年代から少しずつ進んでいる。以上のような変遷を経て河川・運河利用の環境整備は整いつつあると言える。

②観光舟運は河川の水質悪化や自治体間連携が上手くいかなかったことなどにより、事業の縮小や廃止があったが、2010年代から活発になっている。また、市民の河川・運河利用やイベント開催が、2000年代後半から活発になっている。

江東内部河川地域では、河川・運河の利用が多い拠点的地区が存在することが分かった。その拠点的地区の中で、市民・民間事業者の利用組織が複数存在する3つの地区について、詳細に調査・分析をした結果、更に以下のことを明らかにした。

③公共事業による橋、船着場、親水空間、遊歩道の整備が基盤となり、市民などの河川・運河利用が始まり、その後市民などの活動が活発になるに合わせて、公共事業によって艇庫などが整備されている。

④歴史・文化の伝承、災害時対応が、市民の河川・運河利用が始まった、または活発になった要因である。

⑤市民の河川・運河利用組織は、相互に刺激を受け合い、情報交換し、連携している。また民間事業者も市民と連携している。

なお、本論文は学術講演会において発表した研究で、参考文献11) 12) をもとにしている。

### 注釈

- 注1) 参考文献1) 3) 4) 5) 6) 7) 8) 9) を参照した。
- 注2) NPOを「非営利での社会貢献活動や慈善活動を行う市民団体」、民間事業者を主に舟運事業を行う民間企業とする。
- 注3) 1950年代半ばから1970年代半ばにかけての河川・運河沿いの中小工場の地下水の汲み上げにより、江東内部河川東部地域では地盤沈下が進行した。
- 注4) 1957年から1975年にかけて整備された、高さ約3~4mの直立のコンクリートの堤防。1980年から緩傾斜型の堤防、1985年度からはスーパー堤防が整備されている。
- 注5) 1960年頃の隅田川のBOD(生物化学的酸素要求量)は35~40ppmであり、魚の生息や悪臭受忍の限界を超える汚れた川であった。BODとは、好気性微生物が一定時間中に水中の有機物(汚物)を酸化・分解する際に消費する溶存酸素の量。水の汚染を表す指標のひとつで「ppm」で示す。
- 注6) 1971年に東京都低地防災対策委員会が、江戸川区の中小河川の埋め立ての是非を問うために住民に対して行ったアンケートである。結果として、圧倒的に川を残してほしいという意見が多く、これが古川親水公園の整備につながった。
- 注7) 従来の堤防よりも緩やかな勾配の堤防。樹木の植栽やテラス整備など親水機能をもつ。
- 注8) 河川の管理等に関する基本法。旧河川法は1896年に制定された。1997年の河川法の改正で「環境」の視点が入れた。
- 注9) 1885年の隅田川の大洪水の翌年1886年に川蒸気会社が設立され、市民に「一銭蒸気」や「ポンポン蒸気」の愛称で水上交通や観光として親しまれた。
- 注10) 両国橋から蔵前にかけて老舗「いな垣」や「子安」など23軒の料亭が並び、それぞれが船着場から客は船宿の船で隅田川に出ていた。昭和30年代の柳橋の料亭の全盛期には、それらの料亭は「両国川開大花火」の主役であった。
- 注11) 江東区清澄町周辺の有志が集まり、川の環境保全と子ども



もの環境教育の目的で結成された。岩手県山田町の織笠漁協から卵を譲りうけ、小中高幼稚園などで稚魚を育て隅田川に放流する活動をしている。

注12) 参考文献10) を参照した。

注13) 江東区の水辺に親しむ会が行ったワークショップを機に、防災船着場の認知拡大を視野に入れ、深川観光協会と江東区の水辺に親しむ会が中心となって、石島橋周辺と黒船橋・高橋乗船を利用して毎年開催している。

注14) 地域の特色を現したまちなみをつくっている地域、これからの都市景観を創造していく地域などを、重点的に景観の誘導や保全を図るために指定される地区。江東区では、水辺の賑わい創出を軸に2007年に「深川万年橋景観重点地区」、2013年に「亀戸景観重点地区」と「深川門前仲町景観重点地区」を指定している。

注15) 東京23区で初のカヌー部。設立当初は、江戸川区のもみじ大橋の艇庫や船着場を利用していた。2012年には江東区の高校生を対象にした「江東ジュニアカヌークラブ」が創設された。

12) 川島優太 他, 「高度経済成長期以降の江東内部河川・運河利用に関する研究 (2) 拠点利用地区の変遷, 日本建築学会大会学術講演梗概集都市計画部門」, pp.873-874,2014

(2014年9月29日受付)

#### 参考文献

- 1) 難波匡甫, 「江戸東京を支えた舟運の路-内川廻しの記憶を探る」, 法政大学出版局, pp.2-10, 2010
- 2) 中野恒明, 「都市環境デザインのすすめ 人間中心の都市・まちづくりへ」, 学芸出版社, pp.150, 2012
- 3) 陣内秀信+法政大学陣内研究室, 「水の都市 江戸・東京」, 講談社, pp.4-5, 2013
- 4) 東京都, 「荒川水系 江東内部河川整備計画」, 2005
- 5) 久保田稔 他, 「運河と閘門 水の道を支えたテクノロジー」, 日刊建設工業新聞社, pp.174-176, 2011
- 6) 東京都, 「荒川水系 隅田川流域河川整備計画」, 2007
- 7) 東京の川研究会, 「『川』が語る東京 人と川の研究史」, 山川出版社, pp.100-103, 2001
- 8) 江東区, 「江東区史」, ぎょうせい, 1997
- 9) 東京都建設局, 「東部低地帯の河川施設整備計画～地震・津波に伴う水害から 300 万人の命と暮らしを守るために～」, 2012
- 10) 細田渉 他, 「まちづくり協議会が主体となる『船カフェ』の実態, 日本建築学会技術報告集第 19 巻第 41 号」, pp.303-308, 2013. 4
- 11) 桂達也 他, 「高度経済成長期以降の江東内部河川・運河利用に関する研究 (1) 公共整備事業と利用の変遷」, 日本建築学会大会学術講演梗概集都市計画部門, pp.871-872, 2014